

## 「高校生になれたね！ みんなといっしょにがんばるよ。」

2025 年 8 月 24 日 島田直子

息子の有は、現在高校 1 年生です。社会人と大学生の姉を持つ 15 歳の男子です。

生後 3 日で低血糖を起こし、NICU へ緊急入院しましたが、幸いなことに、その後は元気にスクスクと育って行きました。乳児期より、音の過敏がはじめ、次第に癇癪、夜泣き、言葉の遅れが出はじめました。

### ○幼児期

一歳半検診時、発達の遅れを指摘されていたので、その後は保健センターの方と連携をとり、親子教室へ通いました。

3 歳になる頃、療育園を勧められ、母子通園することになりました。その後、医療機関で詳しく検査した結果、広汎性発達障害自閉症、知的障害と診断されました。

その頃の有は、偏食、癇癪がよりひどくなり、私も疲れてきていました。一年半通った頃、次の進路を決める時期になりました。

私達は、有を公立の幼稚園へ通わせると決めていたので、その旨をお話ししました。

中には、まだまだ不安の残る状態での卒園を心配する先生もいらっしゃいましたが、地域の小学校へ進むためには、地域の幼稚園で二年間過ごす必要があると感じていたので、入園予定の幼稚園の先生とも時間をかけてお話しし、受け入れていただけるようお願いしました。

その後、療育園からの引き継ぎもしていただき、いざ入園となりました。幼稚園へ通うようになり課題となったのは、有に対しての支援もそうですが、私の精神的なものもありました。

一年半を療育園で過ごした事はいい経験にはなりましたが、その間に地域との関わりが疎遠になってしまっていました。また、「我が子はみんなとは違う」と言う、私の中の差別意識もあり、私が周りになかなか心を開けず、葛藤する日々が続きました。と、私は色々と苦悩していましたが、当の本人は、意外と周りの子供達に受け入れてもらい、マイペースに楽しんでいたようです。

あっという間に二年が過ぎ、小学校へ入学を考える時期が来ました。私達夫婦の意志は変わらず、地域の小学校へと決めていましたが、有はまだ言葉も少なく、癇癪と偏食は続いていました。しかし、この二年間で有と過ごしてくれた子供達と一緒に入学させたい！その一心で、学校と話し合いを重ね、体験入学もさせていただき、入学が決まりました。

### ○学童期

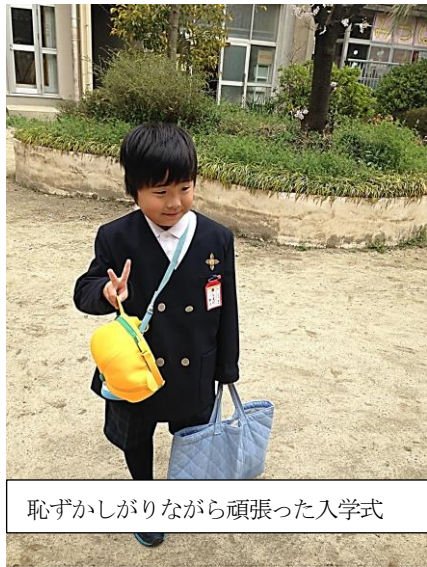
いよいよ小学校へ入学。有は小学校の中にある、支援学級に在籍となりました。支援学級への入級に対して抵抗はなかったのかと思われる方もいるかもしれませんが、私にはありませんでした。なぜなら、長女も 5 歳の時に発達障害の疑いがあると言われ、入学時より支援学級に在籍していたからです。この選択については、振り返ると色々と思う

ことがあります。あの時は家族で悩みながら一生懸命出した結果でした。学校へは集団登校と決めていました。そうする事で、近所の子供達との関係を深めようと思っていたからです。その頃、次女が五年生だったので、一緒に行ってもらい、私はその後をついて行くという感じでした。

一年生の時は、まだまだ周りもソワソワ落ち着かない感じで、有も慣れない環境や伝わらない自分の持ちを泣いて寝そべって表現しているようでした。そんな時、いつもそばに居る男の子がいました。何を話すでもないのですが、有が投げた靴をそっと持ってきて、じっと有を見ていました。

またある時、支援の担任の先生から、「とても有くんによしくしてくれる女の子がいる」と聞きました。私はその女の子のお母さんに一度お会いしたいと思い、運動会の日に思い切って話しかけてみました。そのお母さんは私に、どうして有と仲良くなったのか教えてくれました。

「うちの子が泣いていた時に、みんなは気を使って声をかけなかったんだけど、有くんだけは、大丈夫？って、言ってくれたみたいです。その事が嬉しく



恥ずかしがりながら頑張った入学式

て、いっしょにいるみたいです。」そのお話を聞いた時は本当に嬉しかったです。今まで、周りで関わってくれた人達からもらった優しさを有はちゃんと感じ取っていた。そして、今度は、自分がそれをみんなにかえしているのではないだろうか？と思いました。

二年生になりました。いよいよ勉強も難しくなり、みんなと同じ教材を使うことを諦めることにしました。その頃はまだ字も読めなかったので、引き続き国語と算数は支援学級でとなりました。

二年生のクラスはなかなか元気な男の子が多く、その頃の私は、障害児のある我が子がイジメられはしないかとヒヤヒヤしていました。私が学校へ迎えに行くと、息子は男の子とよく一緒にいるのですが、そのメンバーがいわゆる「やんちゃな子供達」で驚きました。なぜなら、今までは、息子の周りには、お世話好きな女の子が多かったからです。ですが、学校からの連絡も無く、なんとかうまくやっているのだろうと思っていました。

ある時、私が先生に、やんちゃな男の子達と息子はうまくやっていたのでしょうか？と聞いたことがありました。先生は、「あの子達は、有くんに近い行くんです。有くんも寄って行くんです。いらんことも言いますが、有くんは泣いているとあの子達のところに慰めてもらいに行ったりします。不思議な友人関係があるんです。実は、有くんがある男の子の顔を引っ掻いた事がありました。学校からお家に連絡した時に、先生は引っ掻いた子をひいきして、怒ってないんちがうか？といわれました。でも私は、有くんが悪い時はちゃんと怒っています。と、そのことを伝えました。そうしたら、お父さんが、それならいい。うちの子も男の子や。怪我くらい構わない。といってくれたんです。」と、話してくれました。

私の分からないところで繋がっている友達や、色々と問題はあっても間にあった学校先生や、受け入れてくれる友達とそのご家族に心の底から感謝しました。時には殴り合う事もあったようですが、その経験から、私の中の有が、少しずつ変わっていきました。この時にケンカというものを息子に教えてくれた男の子たちを私は“心の友”と呼んでいます。

三年生になりました。その年、今まで通っていた校舎が新校舎に変わり、登校ルートも変わるという、有には大変な変化の年になりました。

やっと学校生活にもなれ、落ち着いてきたのに、今度は自分の行き場のない気持ちをクラスメイトへぶつけるという行為に変わりました。毎日泣きわめく有を支援の先生と教室の外へ出す。この繰り返し、私は疲れ果てていました。

私が北河内連絡会の方たちに話を聞いていただいていた時に、「障害児としての有くんではなく、一人の人としての有くんを理解していますか？」と、言われハッとしました。私は有の病名や特性は説明できても、彼自身を説明できませんでした。

一週間悩んだ結果、私は思い切って有の支援学級への取り出しを全て辞めることにしました。支援学級の先生は驚いて、「そんなことをして有くんが潰れてしまったらどうするの！」と、心配していました。

その先生は有のことをとてもかわいがってくれていることを知っていました。先生の心配する気持ちもよく分かりました。しかし私は、有とみんながもっと一緒に過ごす事で、有を分かってもらいたかったし、私も知りたかったの、その気持ちは変わりませんでした。

いざ、担任の先生と話すことになりましたが、新任だったその先生は意外にも、二つ返事で了承してくれました。そして、「どこまで出来るか分かりませんが、やってみましょう！ダメだったらまた考えましょう！私はやる前から諦めるのは好きではないんです。」と、言ってくれました。その時、私の気持ちが明るくなりました。

また、教材もみんなと同じものを持たせたいとお願いしました。それは、参観日の時に、有が隣の子の漢字ドリルを羨ましそうにみていた事からでした。いつのまにか、私が勝手にあの子の大切なものを奪っているような気持ちになりました。その話が出たのはまだ1学期の六月のことで、有はまだまだ気持ちが安定できていませんでした。

三年生が終わる頃、クラスメイトの女の子のお母さんにお会いしました。その時に、そのお母さんが私に「実はうちの子は将来、保育士か支援学級の先生になりたいと言ってます。それは有ちゃんと知り合ったことが関係していると思います。」と、話してくれました。泣きたくなるほど嬉しかったです。他にも、「一緒に地域の中学校に行こう！」と、言ってくれる保護者の方とも出会うことができました。



1 年生運動会 ピストルの音に驚きながら、はじめての 50 メートル走を走る。

四年生になりました。勉強、宿題は引き続き、みんなと同じものをと先生に話しましたが、内容の難しさや量の多さに私の気持ちが追いつかず、負担になり始めました。また、「みんなと同じものを」という気持ちと、「負担だ」と思う自分の気持ちとの矛盾に悩まされました。

そんな気持ちを学校の先生に相談した時に、先生に、「お母さんは有くんは、みんなと同じ勉強を習得させたいのではなく、体験させたいのではないんですか？ならば同じ量をする必要は無いんじゃないですか？大丈夫ですよ。有くんは無理のない量を考えたらどうですか？」と、言われ、ハッとしました。私はまだまだ有と向きあえていなかったのではないかと感じました。

5年生になりコロナの時期に入りました。

不安定な毎日の生活と思春期のイライラなどが重なり、他人や自分を傷つける行為が激しくなりました。そんな中、林間学校がありました。本人はみんなと行きたい気持ちでいっぱいですが、私はヒヤヒヤしていました。家族意外と外泊をしたことがなかったことや、その頃睡眠のリズムが乱れていたのも、みんなと一緒に寝る事は難しいだろうなあ…と悩んでいました。

いざ林間に向けての懇談会が始まると、担任の先生は、「班わけ表」や「就寝メンバー」などを見せてくれました。とても構えていた私はあまりの驚きに、思わず「先生チャレンジャーですね！私はもっと色々聞かれたりすると思っていました。もう決まっているんですね！」と言ってしまいました。

先生も驚いて、「普通に決めてしまいました…。ダメでしたか？」と言った感じで笑っていた気がします。私は、とても嬉しいです！と、先生に伝えました。

…いざ林間学習。

バスで水筒を振り回す、キーホルダー作りで怒り出す…色々ありましたが、なんとか無事に帰宅しました。本人は大満足だったようです。

その頃私の中で一番悩んでいた事は「性」に関する事でした。息子の異性への興味がとても高まりはじめ、同時にトラブルも出て来た頃だったので、有にあった性教育を受けさせたいと思いましたが、専門機関が見つからず、見つかってコロナで休止中などばかりでした。

私と先生は頭を抱えていました。そんな中、先生は色々な絵本や教材を探し、性教育の基本である、「自分も相手も傷つけてはいけない。」と言う心の土台から始めてくれました。また、息子はとにかくイライラしていて、下校途中で、自分の持ち物を投げ捨てて帰ったり、家で大暴れするなどがありました。今考えるとこの頃、本人も家族もみんな一番辛かった時期だと思います。

その反面、支援の先生の努力もあり、学習面ではぐんぐんと伸びていきました。

6年生になりました。体も成長し、声も変わりましたが、まだまだ登校をしづる、泣いて暴れるなどはありません。6年生と言えば、修学旅行です。本人はとても楽しみにしていました。

いつもはなかなか朝が辛い息子ですが、ちゃんと早起きをして出かけて行きました。帰ってくるとニコニコで、もみじ饅頭やご当地キーホルダーなど買って来てくれました。その頃、近所の畑のおじさんと仲良くなり、毎日なんだかんだとお話して帰って来ていました。もちろん、おじちゃんにもお土産を買って来ました。

一番楽しかった修学旅行が終わるといよいよ進路の話になりました。学校からは、一度支援学校も見学しておいては？と言われていました。私の中に支援学は行かせる選択肢はありませんでしたが見学へ行きました。本人の反応はこれと言ってありませんでしたが、ある時の下校途中で、近所の中学校の制服の生徒を見つけて、「お兄ちゃんの服、着る。」と、言われた時に、校区内の中学校への進路を決めました。先生方はとても心配していましたが、本人の意思なので変わる事はありませんでした。

## 〇地元の中学校へ

いざ中学校との話し合いになると、「厳しいなあ」と感じました。途中からでも支援学校はどうですか？と言われた時は、支えてくれる北河内の方達と中学校へ話し合いに行きました。入学してから大変な事は多かったと思いますが、とにかく本人は楽しい！と言って毎日登校しました。

二年生での宿泊では、「集団行動が出来てない！有くんの独り言で、みんなが起きるといけないので1人で寝かせました。」などと言われるなど、色々ありました。その度に、私は先生と話し合いを重ねるしかありませんでした。

「みんなと一緒に勉強したい」そう思って入った中学校でしたが、取り出しも多く、先生は、個別で伸ばすことにやりがいを感じはじめていた気がします。息子はだんだんと前髪を引っ張りはじめ、登校を渋るようになりました。



私が息子に「教室でみんなと勉強していいんですよ。」というと、「え？いいの?!」と言う顔で私の方を見た時に、これは学校に言わなければ！決意しました。息子には、「お母さんがみんなと勉強したいって、先生に言っただけから。」と伝えました。

ところが、私1人ではどうしても話が進まず、もう二年の三学期も終わりに近づいていました。時間もなくなっていて、いつも相談に乗ってくれている北河内連絡会の方が、校長との話し合いに一緒に来てくれることになり、必死な気持ちで話し合いに臨みました。結果、次の日から取り出しはなくなりました。息子の行き渋りも無くなり、楽しい中学校生活をはじめました。

三年生でも、もちろん取り出しなしでした。

三年生といえば、待ちに待った修学旅行です！お泊まり大好きな息子はウキウキ。大人達は初めての飛行機にどうしたものか？と頭を悩ませていましたが、一度空港に下見に行っただけでまたウキウキし始めて、今回は初めて自分で旅行の用意をしたり、腕時計をつけたりと、本当に楽しそうでした。2泊3日を楽しんで帰ってきたときには、「楽しかったー！」と大きな声で話してくれました。

楽しかったことの次は、悩みの絶えない進路です。

二年生三学期頃から、息子は「高校生になる！」と言っていました。そのきっかけは、次女が見ていた、キラキラ！の高校生青春映画からでした。僕もなりたい！と、いろいろな場所でその映画のパフレットを見せていました。

二学期から、近くの高校や高等支援学校、自立支援コースなども見に行きました。どこへ行っても楽しい息子の進路はなかなか決まりませんでした。その頃、なかなか踏み込んだ進路選択が出来ない私に、相談に乗ってくれた方が「ズバリ、毎日登校するし、授業も受けるけど、点数は取れません。頑張るので、こちらの学校に入学することになったら支援していただけますか？って、聞いてみたら？」と言われました。

私は驚きましたが、腹を括って、訪問する全ての学校行で、その言葉を口にしてみました。大体の返答は、「全て期待に添えるかわかりません。」「留年になります。」でした。自立支援コースが有る学校の総合学科のコースでお話した時は、「自立支援コースは見に行きましたか？」と言われました。

色々言われて、私が凹んで部屋を出ようとする、有はいつも大きな声で「ありがとうございました！また来ます！」と、先生方に挨拶していました。その後ろ姿を見ているうちに、「この子は自分で人生の扉をこじ開けてるんだな。」と感じました。



中学生、沖縄修学旅行で、友だちに「いっしょに撮ろう」と声をかけて写った記念写真



受験直前、府教委の担当者にアイドルの映画パフレットを見せながら、「こんな高校生になりたい」と訴える。

実は、息子の通う枚方なぎさ高校には、自立支援コースと、総合学科があります。私達は、自立コースも、総合学科も見学に行っていました。有が総合学科の体験授業を受けた時、私から離れて一人で堂々と他の生徒達に話しかけたり、ニコニコと授業を受けている息子を見て、ここだ！と思いました。

息子と何度も話をし、勉強も難しいし、片道1時間、バスと電車に乗ることも話しました。息子は私に、「みんなと一緒にいい！…勉強は簡単がいい。」と、話してくれました。

ギリギリまで悩みましたが、一般受験で第一志望の枚方なぎさ高校総合学科、ダメだったら定時制高校に行こうと有と決めました。周りにはなかなか理解してもらうのが難しい進路選択でしたが、支援の先生、校長先生に協力してもらい、一般受験に挑みました。結果は、全て0点での合格となりました！いつもは定員割れしないはずの学校が息子が受けた年は定員割れし、見事合格でした。

## ○ 高校生活

合格し、いざ入学となると、私は考えることが山積みで、入学前から学校と何度も話し合いをして、いよいよ高校生活が始まりました。毎日重い荷物を背負って通学。はじめは大変でしたが、クラスメイトや先生方の名前をドンドン覚えて、課題も親子でヒーヒー言いながら頑張っていました。

## 「事件」

そんな時、学校から電話がありました。「授業中に怒って教科書を投げ、入り込みの先生を蹴ってしまいました。今日は下校して下さい。」という内容でした。大雨の中迎えに行くと、息子はしょんぼりと生徒指導室から出て来ました。

私は「なんでそんなことしたん!そんなしたら学校におられへんようになるで!」と泣きながら怒りました。

二人で帰る途中、お腹も空いていたのでラーメン屋さんに入りました。おなかもいっぱいになり、息子に改めて何故こんなことをしたのか聞いてみると、「英語コミュニケーションしたかった。先生やっちやった」と話してくれました。帰宅後、担任の先生から電話があり、「本人は何か言っていましたか?」と聞かれたので、息子が私に話してくれたことを話しました。でも、正直、息子の言葉の真相はわからないと伝えました。

すると、担任の先生は、「それは本当だと思います。実は僕の授業中に本人が『先生と勉強したい!やめて!』と、入り込みの先生に言っていたのですが、その先生が教科書をめくってしまっ…」と、事件の真相を話してくれました。

## 無期限停学処分に

そして「明日、校長先生から今回のことについての処分を言い渡すので来てください。」と伝えられました。処分内容は、無期限の停学処分でした。納得いかず抗議するも、学校は、「とにかく課題を頑張ってください!」の一点ばりでした。

停学中は毎日家庭訪問。ただし、1日おきに登校など、不思議な感じでした。また、出されていた課題は、有にはとても難しいものでしたが、途中から本人にあったものに変わりますと言われ、1人でできる課題に変わりました。処分期間中は、登校してもクラスには入れず、別室での学習でした。本人は学校に戻りたい!クラスに戻りたい!その一心で課題に取り組み、ゲームもYouTubeも封印し、規則正しい生活をした結果、12日で処分が解かれました。

処分解除の当日は、朝8時に学校にと言われ、到着すると同時に課題の厳しいチェックが入り、オッケーが出たので校長室へむかいましたが、その前段階で、担任の先生が息子に、「校長先生になんて言うんやった?手あげて、今度からはしんどい時は助けてって言うよ。」と、練習し始めました。初めて見る光景を私はじっと見つめながら、「時々登校して、こんなことも練習していたのか…」と、内心驚いていました。

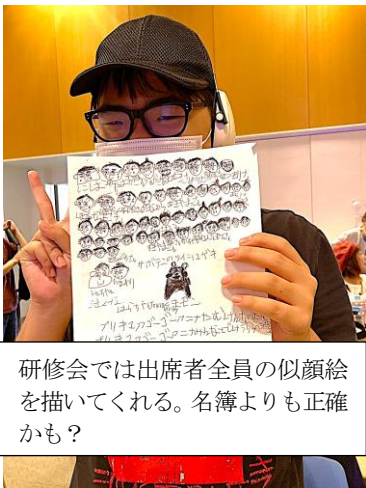
いざ校長室へ入り、「停学中、反省していたと先生方から聞いています。課題も頑張っていたし、生活態度もしっかりできていたので、停学を解除します。これからは、どのように気をつけますか?」と、聞かれた息子は、「投げない、蹴らない!」と言った後に、「英語コミュニケーションしたかった!」と繰り返し言い出し、先生は驚き、私も目が丸くなりました。

先生方は一生懸命に、こっそり手を上げる仕草をして、息子を誘導しますが、全くの無視。私も囁いてみますが、聞いていないのか、フリなのか。大人が大慌てしていると、やっと手をあげて、「助けてください。休憩します」と言うような言葉を発しました。

せっかく練習したのに、本番ではグダグダとなり、でも無事に解除されました。その後も息子は興奮気味で、肩を触ると体も熱くなっていたので、「今日は帰る?しんどくない?」と、私が聞くと、「大丈夫!教室行く!」と言いました。



お母さんと一緒にパネルディスカッションに登壇する



研修会では出席者全員の似顔絵を描いてくれる。名簿よりも正確かも?

その後、別室に戻り、今度は相手方の先生に謝罪となりましたが、またもや、「英語したかった!」と一言いってから、謝罪していました。相手の先生は、あっさりと許してくれました。この子、最後の最後ですごいなあ。と、驚き半分、笑い半分で私は帰宅しました。「俺の言い分も言わせてもらう!」「俺の話を聞いてもらえる最後の場所はここしかない!」と思ったのか?と私は感じましたが、本人は何も言わないのでわかりません。

無期限から始まった停学処分は、12日でなんとか終わりました。その後は元気に通っています。

実は私は、この件で息子に怒られています。事件の当時、迎えに行った際に、本人の言い分を聞かず、先生達の手前、少しキツく怒った事を何日かたって、「お母さん泣いて怒った!」と言われました。何度も言うので、もしかして?と思い、「ごめん」と謝るとそれからは言わなくなりました。なんでもわかっている息子です。

一学期がなんとか終わりました。

本人は、入学してすぐに学習合宿に行ったり、そこで食べられなかったトマトを食べたり、体育祭をしたり、プールに入ったりと高校生活を満喫したと思います。辛いこともあったと思いますが、たくさんの経験をしました。自分で進路を決め、一般受験にチャレンジし、合格して、停学したり…。

停学では悲しい思いをしましたが、「やめてほしい!」「英語したかった!」と、表現できたことに私は成長を感じ、その時の気持ちを大切にしていきたいと思っています。聞く人によっては、こだわりやわがままと取る人もいました。でも、私は成長と感じました。

これからどんな青春が待ち受けているのか、期待しています!